〈資料紹介〉

黒田三郎全集等未収録詩篇「ランプがゆれる木の葉の影がゆれる」

石井美欧

ＶＯＵクラブの詩誌を通読していた際、思いがけず黒田三郎の「ランプがゆれる木の葉の影がゆれる」という詩篇に出会った。

この詩篇は、一九四一年八月、「新技術」第33号に発表されたものであるが、黒田三郎の全集にあたる『黒田三郎著作集』(1)にも収録されておらず、黒田の作品の中で極端に知名度が低いと思われる。管見の限り、先行研究で引用されたこともなく、今まで光を当ててこられなかった詩篇である。ただし、澤正宏編『コレクション・都市モダニズム詩誌15　ＶＯＵクラブと十五年戦争』(二〇一一年・ゆまに書房)には、この詩篇を収録する「新技術」第33号の影印が掲載されており、また、広島市立図書館の黒田三郎資料目録の注記欄にも、「ランプがゆれる木の葉の影がゆれる」の題名が見られる。そのため、新資料という言葉でくくるのは避けたが、今まで埋もれていたこの詩篇は、黒田の作品を研究する上で重要な意味を持つものと考えるため、本稿をもって紹介したい。

【資料】黒田三郎「ランプがゆれる木の葉の影がゆれる」

黒い椅子に凭れて少年は待つてゐた　少年は待つてゐた
闇の中から大きな蝙蝠傘をさしてもうぢき誰かやつて
くるのさ　ほんとにもうぢきさ　待つてゐるひとがゐ
る以上　待たれるひとがゐないなんて　おかしなこと
ぢやないかしら　だからほんとにもうぢきなのさ　少
年は待つてゐた　黒い椅子に凭れて少年は待つてゐた
だが誰も來やしなかつた　微風が吹いてゐた　黒い椅
子に凭れて待つてゐる少年の襟にも微風が吹いてゐた

誰も來やしなかつた

意地悪　僕が待つてゐるつてことを知つてゐるもんで誰も來ないのさ　意地悪

何にも云はないで黒い椅子に凭れて少年は待つてゐた
誰も來やしないつてことははじめからわかつてゐたのさ
きくひとさへあれば！　そのひとことは葡萄の核のやうに無雑作に少年の口から吐き出されたであらう　だがそのひとことをきいてくれるひとは誰もゐなかつた
誰も來やしなかつた　若しも誰かが來たら　若しもさうしたら　無意味になるそのひとことを！　きいてくれるひとは誰もゐなかつた

待ちくたびれて少年は眠つてゐた　黒い椅子に凭れて少年は眠つてゐた　涎を垂らしながら少年は眠つてゐた
少年はたしかに待つてゐたのだつた　戀人を待つてゐる戀人のやうに少年はたしかに待つてゐたのだつた

（「新技術」第33号　一九四一年八月・VOUクラブ）

冒頭、〈黒い椅子に凭れて少年は待つてゐた　少年は待つてゐた〉というフレーズに見覚えはないだろうか。黒田三郎の詩集『ひとりの女に』(2) 収録の詩篇「突然僕にはわかったのだ」の冒頭に〈僕は待つてゐたのだ／その古めかしい小さな椅子の上で〉とあり、類似している。また、「ランプがゆれる木の葉の影がゆれる」中盤には、〈そのひとことは葡萄の核のやうに無雑作に少年の口から吐き出されたであらう〉という印象的なフレーズがあり、これも同じく『ひとりの女に』収録の詩篇「賭け」の、〈ブドウの種を吐き出すやうに／毒舌を吐き散らす〉というフレーズと類似している。『ひとりの女に』のあとがきには、「ここに収録した作品は、一九四八年冬から翌四九年春にかけて書いたもの」とあるが、「ランプがゆれる木の葉の影がゆれる」が発表されたのは、前述の通り一九四一年である。つまり、『ひとりの女に』の詩篇の成立よりもかなり早い時期に、詩句の原型と見られる言葉が生まれていたことが、今回初めて明らかになった。

さて、「ランプがゆれる木の葉の影がゆれる」は、冒頭からそうであったように〝待つ〟ということが全体の主題となっている。ランプのゆれや木の葉の影のゆれを眺めて過ごすほど、〈少年〉は手持ち無沙汰であるというのがおおよそ題名の由来といったところだろうが、手持ち無沙汰であっても、〈少年〉は〈誰か〉を待ち続けている。なぜなら、〈待つてゐるひとがゐる以上　待たれるひとがゐないなんて　おかしなことぢやないかしら〉という思いがあるからである。さらに、この詩篇の発表時期と近い、

一九四〇年六月十日の日記で、黒田は「待つというのは、待たれるひとが来ないから待つということなのだ、と思った」と述べており(3)、この記述から、「ランプがゆれる木の葉の影がゆれる」の〈少年〉の〝待つ〟ことに対する素直な態度には、当時の黒田の考えがそのまま反映されていることが窺い知れる。

黒田三郎の〝待つ〟に関する詩篇について、宮崎真素美氏は、詩集『時代の囚人』(4)と『ひとりの女に』の間において呼応関係が結ばれていると指摘している(5)が、そこに「ランプがゆれる木の葉の影がゆれる」を加えることで、両詩集の呼応に関わる〝待つ〟姿勢は、『時代の囚人』に先行し、戦前から既に存在していたと補完することもできるだろう。

以上の点から、「ランプがゆれる木の葉の影がゆれる」は、『ひとりの女に』収録詩篇の成立をはじめ、今後の黒田三郎研究において、考察されるべき重要な位置にある詩篇と考え、紹介をした。

[注]

(1) 全三巻。一九八九年、思潮社より刊行された。
(2) 黒田三郎の第一詩集。一九五四年、昭森社より刊行された。
(3) 『黒田三郎日記　戦中篇Ⅱ』(一九八一年・思潮社)より。
(4) 黒田三郎の第六詩集。一九六五年、昭森社より刊行された。あとがきによると、一九四六年末から一九四八年の作品を集めた詩集。
(5) 宮崎真素美氏は、「「読む」黒田三郎詩集『ひとりの女に』」(「日本文学」一九九二年八月)の中で次のように述べる。
「『時代の囚人』で〈この古ぼけたくらい部屋の／この小さな椅子から立ち上がり／いったいどこへ行けばよいのだろうか〉〈この古ぼけたくらい部屋の／この小さな椅子の上で／いたずらに坐り心地の悪さに耐えている〉(「小さな椅子」)〈すでに二時間の余もブルジョワの応接間で待っているように／僕はこうして人生において何かを待っていなければならないのか〉(「愚かなからくり」)と問われたのに対し、『ひとりの女に』では〈僕は待っていたのだ／その古めかしい小さな椅子の上で〉〈突然僕にはわかったのだ／そこで僕が待っていたのだということが／何もかもいっぺんにわかってきたのだった〉(「突然僕にはわかったのだ」)とされ、両者は見事な呼応関係を結んでいる。」

＊本稿は、愛知県立大学奨学制度「はばたけ県大生」による成果の一部である。

(いしい　みお)